

## 審査の結果の要旨

論文提出者：中川映里

論文題目：「書き直すこと (rewriting)」としての翻訳と翻訳者の創造性：大正・昭和初期の短篇小説翻訳を事例に Translation as "Creative Rewriting" in Case Studies of English-Japanese Short Story Translations in the Taisho and Early Showa Periods

本論文は、西洋の翻訳研究 (TS: Translation Studies) をはじめとする翻訳理論や、比較文学、文学批評、英米文学史、文体論などの知見を幅広く援用しつつ、従来の原作対翻訳作品、原文対訳文、直訳 (逐語訳) 対意訳 (自由訳)、原文尊重主義対訳文尊重主義といった二項対立を超えたところにある、「書き直す」行為としての文芸翻訳の創造性や自律性を評価しようとしたものである。研究対象の事例としては、とくに大正・昭和期の短篇小説翻訳を扱っている。

本論文は、論文の背景、目的、方法、および論文の構成を記述した序章と論文を振り返ってその意義を記述した結章を除き、6章構成になっており、翻訳研究の理論や方法論を扱う前半の2章、日本における短篇小説の受容と成立、具体的な翻訳事例や翻訳短篇小説の文体を論じる後半の4章に大きく分かれる。

まず第1章では、日本と西洋における翻訳者の機能や翻訳という営みの捉え方の違いも踏まえた上で、ポリシステム論やスコpos理論をはじめとする TS をそのまま日本の翻訳を議論するために用いることの可能性と限界が論じられる。さらに、翻訳文学を、単に原作に言語変換を施しただけの等価の作品としてではなく、それ自体自律的な価値を有するテキストとして評価する本論の立場が明示され、翻訳を「書き直すこと」と捉えるルフェーヴルの理論に基づき、文芸翻訳の創造性が強調される。第2章では、ベルマンの生産的翻訳批評やマルムケアやボアズ＝バイアーの翻訳文体論、さらには翻訳手法の分類表や創作文体論のリストなどが概観され、それらの妥当性の検討に基づいて、具体的にテキストを分析する際の目のつけどころや方法論が提示される。

第3章では、本論の事例研究の対象として、大正・昭和期の短篇小説翻訳を扱うことの根拠と意義が論じられる。短篇小説は高度な創造性と文学性を有する独自の文学ジャンルでありながら、日本ではその成立過程も、翻訳文学との関連性もあまり論じられることがなかった。本章では、翻訳文学が日本における短篇小説ジャンルの成立と大いに関わりがあるとの認識が示される。第4章以降は、具体的な翻訳・出版事例の紹介とテキスト分析の章である。まず第4章では、芥川龍之介によるアイルランド作家・詩人 W・B・イエイツの短篇小説『The Heart of the Spring』の翻訳「春の心臓」のテキストが言語・文体的に分析される。そして、巧みな文章技巧によって原作の詩的修辞性を日本語によって実現するのみならず、登場人物に新たな関係性をも付与した芥川の訳業が、単なる原文から訳文への言語変換を超えた、高度な文学的創造であることが示される。第5章と第6章では、日本におけるアメリカ作家アン

ブローズ・ビアスの受容に焦点が当てられる。まず、第5章では、書誌情報や文学者や文学研究者の証言に基づき、浅野玄府、広津和郎、岡本綺堂、西川正身らによるビアスの訳の出版情報が整理され、さらに外国文学紹介者としての芥川に焦点が当てられる。第6章では、その訳者たちの翻訳テキストが文体的に分析され、綺堂や浅野の訳が、それぞれの解釈と意匠に基づいて一貫性を有する創造的な「書き直し」の事例であるのに対し、西川訳が、処理の一貫性を欠く「プロジェクト不在」のテキストであると論じられる。

最後の結章では、TSをはじめとする翻訳理論を援用しつつ翻訳を「書き直すこと」と捉える立場からの翻訳研究の意義と、その立場からの研究が今後の翻訳研究と文芸翻訳を豊かなものにする可能性が改めて確認される。

本論は、翻訳理論、比較文学、文学批評、文学史、文体論など、さまざまな学理を援用して、翻訳作品が自律的で創造的なテキストたり得ることを、とくに大正・昭和期の短篇小説翻訳を事例として説得的に証明した、きわめて学際的でダイナミックな翻訳研究である。とくに『世界短篇小説体系』（近代社）に着目し、日本における短篇小説翻訳事例の調査と分析から大正・昭和期における短篇小説ジャンルの成立過程を明らかにしてみせた功績は、大いに評価する事ができる。また、翻訳における文体分析は、世界で行われているTSの理論研究の中で近年重要な展開を見せている分野であるが、英米の理論を十分に咀嚼・発展させ、日本文学の翻訳に説得力のある形で応用できている点で、中川氏の論文は独自であり、日本における翻訳理論の発展に寄与するところが大きいといえる。

一方で、研究が学際的であるがゆえの問題点として、用語の使い方や議論の構築の仕方、あるいはそこで用いられる情報や資料の提示の仕方が、それぞれの研究分野の要請するところとずれている部分があることも指摘された。たとえば、第5章、第6章では、そもそもビアスがいかなる作家なのか、浅野玄府、広津和郎、岡本綺堂、西川正身がいかなる文学者・翻訳家なのかに関する説明が不足している。翻訳の文体分析で用いられる言語学の枠組みや用語も、若干正確さに欠けている部分がある。また、原作と翻訳が「等価」とあるとの立場を退けるのは思想的・理論的には興味深いとしても、それによって実際の翻訳批評の参照項目自体が大きく変わることはないのではないかと指摘もなされた。しかしながら、これらの問題点は先に記した本論文の価値をいささかも損ねるものではない。

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。